

ひとくち法話

ほうりんほうじゅ
宝林宝樹

(61)

昭和三十年頃のお話です。その頃、家のお風呂は五右衛門風呂でした。かまどの上に鉄製の釜を置き、下から直接薪などで火をたいてお湯を沸かす日本古来のお風呂です。熱した釜で火傷しないよう木の底板を踏み沈めてその上に乗って入浴します。

お風呂を沸かすには薪が必要です。手の空いた家族の誰かが薪割をします。お湯がさめたら追い焚きが必要です。家族の誰かに助けてもらいます。湯加減はどうかという会話もあったものです。家族の中でも助け合いが目に見えてあったように思います。

現代はどうでしょう。ボタンひとつでお湯を沸かし、追い焚きもします。その意味では一人で生きていける時代かもしれないかもしれません。便利になって助け合っているという意識がなくなりつつあるように思います。私たちは一人では生きていけません。誰かに助けてもらいながら、支えてもらいながら生きています。

私のいのちは、大きな恵みの中で生かされているいのちであることに気づきなさいということが、仏様の願いだと思うのです。

